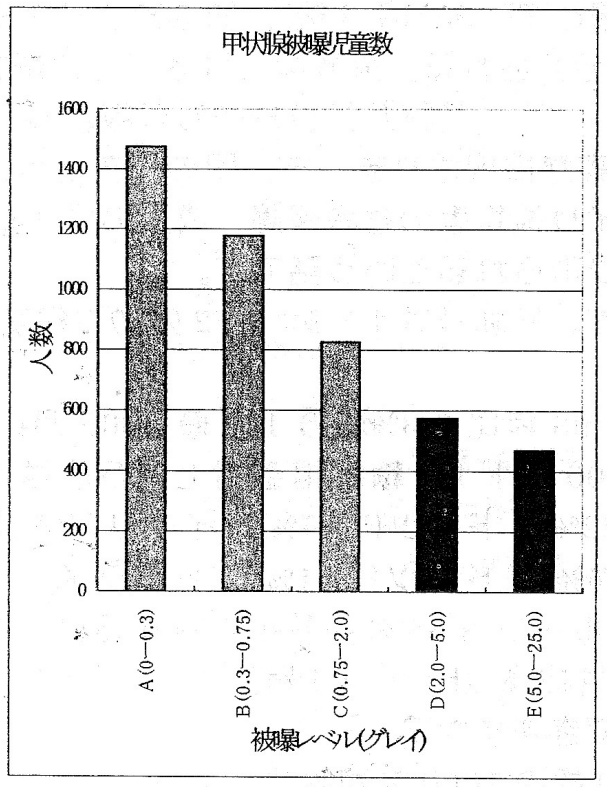
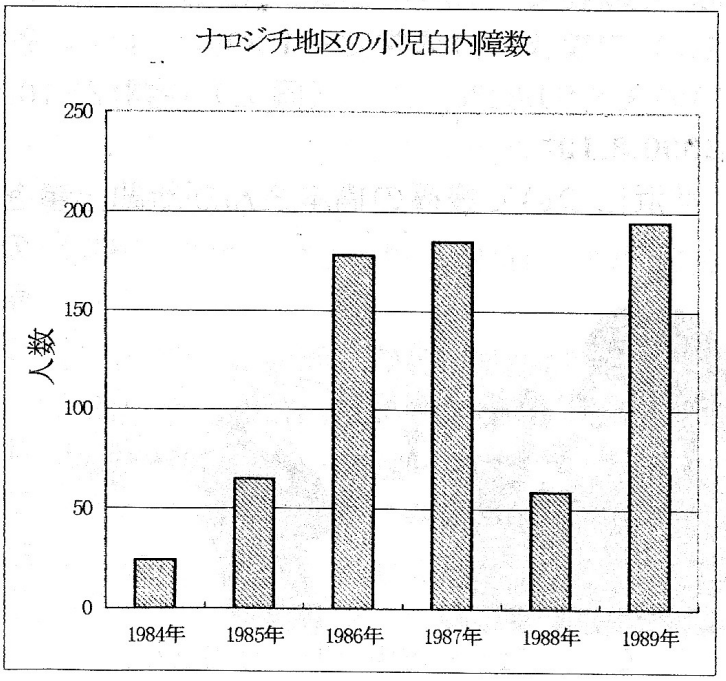
連載 17　**ナロジチ地区の子ども達の被曝と白内障発生数**

・・・元ナロジチ地区病院外科主任医師の証言・・・



チェルノブイリ事故の被曝者の被曝線量は意外に分からない。特に住民の被曝量は不明なことが多い。ここに紹介するのは、私たちが支援している、ナロジチ地区病院のもと外科主任、ボグダン・アントノーヴィッチ医師の証言である。事故当時ナロジチ地区に住んでいた約 5000 名の 15 歳以下の児童の甲状腺被曝（ヨウ素 131 による）の測定結果である。ナロジチはチェルノブイリから南西に 70Km、浜岡から豊橋までの距離である。ここでは事故当日、毎時最高 3 レントゲン（平常値の 30 万倍）の線量が観測されている。当然、多量の放射能が飛来し、何も知らずに外で遊んでいた子ども達を直撃した。左のグラフによれば、2 グレイ以上の被曝児童が 1000 名以上もいたことになる。恐ろしい数である。（単純な比較は難しいが、東海村ＪＣＯ事故で被曝した作業員 3 名はこの範囲に入る。全身被曝なら数百名死亡に相当）。通常私たちの自然放射線による被曝は同様に表せば、年間 0.1 ミリグレイ程度である。

ボグダン医師は、右のグラフに示された、ナロジチ地区の小児白内障の推移も紹介している。
白内障は、一般に最も典型的な放射線障害として知られている。９通常は大人の病気だが、子どもがかかることは少ない。右のグラフはナロジチで事故後にこれが急増する様子が示されている。なお、1988 年に少ないのは眼科医が病気のため、診断が中断したためである。1989 年は 1・3 月までのデータで、たった 3 カ月間にそれ以前の 1 年分が発生している。子どもに限らず、現地で私たちは事故後目が悪くなったという話を良く聞くが、こうした訴えを裏づけるデータである。



（河田昌東）

Nov02&07.jpg
(2152 X 2932)